

時節に合わせた コラム”結の扉” の紹介です



ここでは、各月の季節感のある院長コラムアーカイブスを自ら選定してご紹介します。

過去6年間のコラム（約600編）とこれからの新しいコラムも季節に合わせてご紹介いたします。

気象の世界では、春は3・4・5月、夏は6・7・8月、秋は9・10・11月、冬は12・1・2月です。

それでは**10月の推奨コラム**をお楽しみください。

Vol.42	「天高く馬肥える秋」
Vol.61	「局地風」
Vol.116	「空を流れる川 atmospheric river」
Vol.132	「春雨」
Vol.223	「おかえりモネvol.11」
Vol.311	「あらためて台風2022」
Vol.516	「茜雲」

※コラム”結の扉”では職員・研修医・地域の方からのコラムを毎日更新しており、現在1,600編の物語を掲載しています。お時間のある時に足助病院への素敵な扉をお開きください。

次ページでは、日本農業新聞8月16日号12面に掲載された小林病院長の記事、CBニュースHP（8月18日）に掲載された小林病院長のインタビューを紹介しています。

「のうとく」に 小林病院長のインタビュー記事が 掲載されています！

給食百景

シェア奪還

のうとく 農家の特報班

読み解く食農データ

酷暑 体調不良、回復に日数も

高温・渇水影響アンケート

日本農業新聞「農家の特報班」の高温・渇水関連のアンケートで、全回答者の6割に当たる64人が今年に入ってから農作業の途中で終了後、高温の影響で「体調不良になった」と答えた。農家は屋外での作業が多い一方、体調が回復するまで一定期間がかかるケースもあった。酷暑がいつまでも続く中、専門家は「タメジは蓄積する。十分な備えと適切な行動が重要」と指摘する。

熱中症遅れて認識

今年に入って「熱中症などの体調不良になった」と回答した64人のうち、回復までの日数は最多が「1日程度」の37人。「2、3日程度」が16人、「1週間程度」が2人、「1週間以上」が1人と回復まで日数がかかった人もいた。具体的な症状として「頭痛やめまい、倦怠感（けんたい）など」が挙げられた。「体調が悪

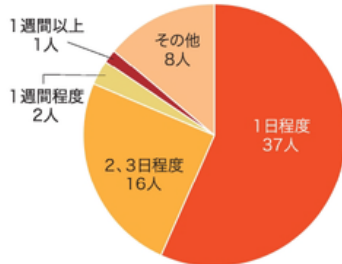
くなり、家族に指摘されて熱中症の症状だと気付いた」（佐賀県40代男性・野菜農家）との声も届いた。各種工夫も要警戒。高温下で体調を崩さない工夫を尋ねると、休養や水分・塩分補給などに加え、ファン付き作業服の着用を挙げた人が目立った。ただ、体温以上の気温のある環境では効果

高温下で体調を崩さないため、どんな工夫をしている？

 兵庫県 50代男性 水稲農家 朝早くから作業にかり、昼休みを長く取る	 宮崎県 60代女性 畜産農家 作業がつかなくなったら休憩を入れる	 新潟県 40代男性 自営業 ファン付き作業服を着用。体温超えの気温は災害と考えて避難
--	---	---

 岩手県 60代男性 兼業農家 休憩時、車のエンジンをかけてエアコンを効かせて身体を冷やしながら水分補給	 兵庫県 50代男性 農業法人従業員 夜間、睡眠時にエアコンをしっかりと活用
--	---

高温で体調を崩して回復するまで、どれくらい？



調査概要

アンケートは特報班のLINEで告知し、3日までの5日間、募集。無作為抽出の世論調査と異なり、多様な意見を聞くため調査した。40都道府県の112人が回答。うち専業・兼業農家、農業法人従業員は97人だった。

どう対策？ 農家の実践例

見守り重視 異変見逃さず

「その時は笑い話で済んだが、何事もなくて安心した」。神奈川県30代男性果樹農家は、今年の夏、農作業をそう振り返る。この農家の園地の周辺には別の人が手がける野菜畑も複数並ぶ。夏場はこの農家が駆け付けると、

ある日、畑で作業中だった一人の姿が見えなくなったことがあった。「まさか倒れたのでは」と、この農家が駆け付けると



作業合間にプールで冷却

牛舎で2時間作業をした後、家庭用プールで体を冷やす。北海道の30代男性畜産農家は、そんな工夫で高温下での体調管理に努める。もともととは手動のもの



「農家の特報班」に取材してほしいことを、LINEでお願い。友だち登録はQRコードから。

JA愛知厚生連・足助病院 小林真哉院長に聞く アンケート結果を専門家はこう評価する。気象予報士の資格も持つJA愛知厚生連・足助病院の小林真哉院長に尋ねた。「熱中症などの体調不良になった」が6割を占めたのは、「多いという印象」と話す。複数の回答者が挙げた「車の中でクーラーに当たる」という休憩方法は、フロントガラスからは、フロントガラスから

備えを日常の習慣に

日差しが入ることもあるため一定時間内であれば実践しても良い」と話す。夜、エアコンを効かせたまま就寝することも「適温に設定すれば体調の維持につながる」との見方を示す。小林院長は「作業環境や体調を整え、気象情報を的確に把握するなどの備えが重要」と指摘。「どのような服装で臨み、体をどう冷やし、どこで休憩するかも定めておく必要がある」と話す。熱中症などに對するさまざまな備えを「日常の習慣として定着させていくことが大事」と強調する。

**CBニュースホームページにて
病院広報アワード2025
ファイナリスト小林病院長の
インタビューが
掲載されています！**



**こちらをクリック！
(外部サイトに移動します)**

**[HTTPS://WWW.CBNEWS.JP/NEWS/
ENTRY/20250818090836](https://www.cbnews.jp/news/entry/20250818090836)**

